

2014（平成 26）年度 文学部自己点検・評価報告書

ラーニング・アウトカムズの測定状況

【1】現状の説明

（1）学部専門科目のラーニング・アウトカムズは、学部の理念・目的に照らして適切なものであるか。

文学部は 2011（平成 23）年秋に、学部が提供する専門科目全体のラーニング・アウトカムズを、以下の 6 項目に策定し、11 メジャー 1 専修の体制で新カリキュラムをスタートさせた翌 2012（平成 24）年度から実施し、同時に履修要項と学部ホームページで公開した。

（1-1）

<文学部専門科目ラーニング・アウトカムズ>

- ①人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解、鑑賞、評価することができる。
- ②基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。
- ③論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。
- ④母語および母語以外の言語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。
- ⑤文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。
- ⑥人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。

この 6 項目は、本学建学の精神と、「文学部は、『生命の尊厳の探究者たれ』『人類を結ぶ世界市民たれ』『人間主義の勝利の指導者たれ』との三指針を掲げ、言語、文学、哲学、歴史、社会など、広範な文化領域にわたる教育および研究を通して、真の教養を備えた『全体人間』『創造的人間』として、内外に活躍しうる人材を育成する」と学則に定める学部の人材養成の目的に基づくものである。ここでいう「全体人間」「創造的人間」とは「生命の尊厳を基調とし、すべての人を平等ととらえ、あらゆる人が自分らしさを発揮できる人間主義の世界実現に貢献する人材」（1-3）である。学部で開講される個々の専門科目は履修する文学部生が 6 項目のいずれかを身につけることを目指し、さらに卒業に必要な専門科目 64 単位の履修によって 6 項目すべてを身につけることを目指すものであり、学部 3 ポリシー（ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの各ポリシー）（1-2）とも整合的であり、学部の理念・目的に照らして適切である。

（2）ラーニング・アウトカムズの適切性について、定期的に検証を行っているか。

ラーニング・アウトカムズの適切性の検証については、2012（平成 24）年度からスタートした新カリキュラムの成果の検証と合わせて行う方針であり、明年 2015（平成 27）年がカリキュラムの完成年度であることから、中間期にあたる本年度（2014 年度）前期の各専門科目のラーニング・アウトカムズと「到達目標」の測定について、各教員に担当科目 1 科目について「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」（以下「自己評価報告書」）

を提出してもらった（1－4。）合計 34 科目の報告書が提出されたその結果は次項に示すが、現在実施中のメジャー制に関する学生へのアンケート調査の結果と合わせて、より綿密な検証を行う予定である。さらに、2017（平成 29）年度からの新カリキュラムについて、現在学部カリキュラム検討委員会を中心に検討しており、ここでもラーニング・アウトカムズの適切性について検証を行っている。

（3）ラーニング・アウトカムズに基づく授業の「到達目標」は適切に設定されているか。
到達度の測定は適切に行われているか。

①「到達目標」の適切性について

本年（2014 年）6 月に、学部の 5 人のコーディネーターの協力を得て、学部の本年度（2014 年度）前期の全授業科目のシラバス上の「到達目標」が学生に分かりやすく明記されているかを点検した。その結果、「到達目標」については、「・・・することができる」などの表現が多く見られ、概ね以前に比べてわかりやすい記述が多くなっている。一方で、「・・・学の基礎知識の習得」「・・・学んだことを人生の糧とする」など、より具体的な表現が望まれるものも少なくない。もちろん「知識・理解」のレベルと「態度・志向性」のレベルを同じように示すことはできないが、到達度をどう測定するかという観点からも、より具体的な「到達目標」の提示が望まれる。この点は、前述の「自己評価報告書」において、報告のあった 34 科目の「到達目標」の項目数の合計が 76 と、1 科目平均 2 項目余りであったことから言える。すなわち、「到達目標」が 1 つという科目も少なくないのであり、一層の具体化の必要がある。（1－4）

また、「到達目標」と成績評価との関係については、シラバス点検の結果では、「到達目標」を達成した学生がどのような成績となるのかについて、教員の半数ほどが成績 A の到達基準または成績 B の到達基準を示しており、後者のほうが多い。本学全体としては「B 以上」という基準を示しており、その線での統一が望まれる。

②到達度の測定の適切性について

上記のシラバス点検では、各授業における具体的な評価方法については、ほとんどの教員が「定期試験○%（または、最終レポート○%）、課題レポート△%、小テスト□%、授業中の参加態度@%」（合計 100%）のように示しており、とく課題レポートあるいは授業の感想等をポータルサイト上で提出させるという形式が定着しつつあり、到達度の測定に活用されていることがわかる。

この点は「自己評価報告書」においても確認できる。定期試験、最終レポート以外に、毎回の小テスト、單元ごとの確認テスト、授業外の CollabTest（本学独自のポータル上のテストシステム）、課題レポートや予習ノート、学習の自己評価レポート、時間内小レポート、ワークシート、ピアレビューフォーム、ディカッション内容のレポートペーパー、簡易なループリックなど、独自の測定ツールを活用しながら、より適切な測定に努めている。また、授業アンケートにおける到達目標の達成度の項目や学生の意見・感想などからも、各教員は事後的に到達度を確認しその向上に努めている。なお、文学部の科目の特性とも関連するが、より具体的な評価基準を示した明確なループリックの活用とシラバスへの明記、到達度測定アンケートの実施または授業アンケートにおける到達度測定項目の設定など、一層の測定の適切化とその把握が望まれる。

因みに、本年度前期における授業アンケートでは、学生の到達目標の達成度の項目は、全学平均の 3.37 に対して、文学部の平均は 3.35 であった。(1-5)

③ラーニング・アウトカムズと各科目の関係について

前述の「自己評価報告書」において、各科目（34科目）の「到達目標」が学部ラーニング・アウトカムズのどの項目に該当するかを、担当教員に各項目最大3つまで示してもらった結果は以下のとおりである。

LOs NO	①	②	③	④	⑤	⑥
該当数	45	39	37	17	14	6

「知識・理解」や「汎用的技能」に関する該当項目が多く、「態度・志向」に関わる該当項目が少ない。ラーニング・アウトカムズの適切性については、前述のとおり、今後も検証していくが、「態度・志向」に関わる科目は客観的で適切な評価が難しい科目でもあるため、「到達目標」における該当数が少なくなったことが考えられる。こうした科目における「到達目標」のより具体的な設定と到達度測定の適切性の確保が課題であるが、一方でこうした科目は本学および本学部の独自性をより良く出せる科目であり、今後さらに積極的に展開していきたい。

【2】点検・評価

①効果が上がっている事項

各担当教員は、定期試験や最終レポートだけでなく、多様なツールを用いて「到達目標」の到達度を測定しており、成績評価の適切性の確保に努めている。これに関連して、「到達目標」を達成するために、学生に多様な課題を出し、ディスカッションやプレゼンテーションなどのアクティヴ・ラーニングの実行に努め、さらにそれらに対するフィードバックをとおして、教育の質保証につなげている。

②改善すべき事項

現在本学部の個々の提供科目がラーニング・アウトカムズのどの項目を担う科目であるのかを明示したシラバスやカリキュラムマップは作成していない。学生へのアカウンタビリティや担当教員の意識強化の点でも、本学共通科目と同様に、ポータルサイトのシラバス上にこれらを明記する必要がある。

【3】将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

「到達目標」の達成とそれによる教育の質保証については、FDの一層の展開や、より多くの教員と科目が受け入れ可能な客観的な測定方法の研究など、学部としてより組織的に取り組んでいきたい。

②改善すべき事項

ラーニング・アウトカムズと各科目の関係をシラバス上に明示するには、システム上の若干の課題があるが、可能な限り早く実現し、2017（平成 29）年度からの新カリキュラムの実効性をより確かなものにした。

【 4 】 根拠資料

- 1-1 2012 年度履修要項
- 1-2 創価大学学則
- 1-3 2014 年度履修要項
- 1-4 授業の「到達目標」に関する自己評価報告書
- 1-5 2014 年度前期授業アンケート結果